

# 弥生 vol.18



令和2年9月発行 弥生神社

02 弥生神社 ～春から夏へ～

03 土馬に願いを 玉井ゆかり

06 山の時間 「陸の孤島」 中村政子

09 大いなる緑を越えて 和田浩一郎

11 沖家室島より 「海を渡ってきた宮島様  
～周防大島付近に伝わる宮島伝説～」 松本昭司

13 浜 森 岳人

15 旅の止まり木・10 「次の旅のために」 谷口明子

17 本を読む「海」 小河洋友

18 続・トルコ女性の手仕事 上岡和江

21 蚕の神様を訪ねて (六)「カイコを飼ってみた」 谷口悌三

23 植物紀行 「ツユクサ」 荒谷 渚

25 季節のレシピ 「南瓜ういろう」

27 ご自宅でワークショップ・書写会／

宗教・文化講座／編集後記

海

四月十一日、十二日は弥生神社例祭でした。神職による祭典を行いました。あわせて「新型コロナウイルス感染症流行鎮静祈願祭」を斎行しました。



## 弥生神社 ～春から夏～

六月三十日、「夏越の大祓」を斎行しました。茅の輪をくぐり、『大祓詞』を奏上、人形で半年の罪穢れを被いました。今年は強い風雨の中での大祓となりました。



茅で奉製した「茅の輪守り」をお分けしました。



# 土馬に願いを

玉井ゆかり

皆さん、土馬ってご存知ですか。

読んで字の如く、土で作った馬です。

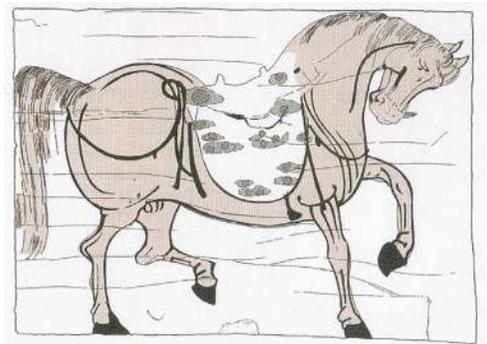
弥生神社では昨年から講座やワークショップで土馬を作っておりますので、自分の土馬を持っている方もいらっしやるでしょう。

日本では古代から、馬は神さまと人とを結びつける特別な生き物であったようです。生きた馬の代わりに土や木の板、石などで馬を表したものの（＝馬形代・うまかたしろ）を作り、祭りや祈りに使ったと考えられます。それをここで少し見ていきましょう。

神社で神さまにお願い事をするときに「絵馬」を奉納します。絵馬は薄い木の板で出来ていて、干支にちなんだ絵や神社に係ある絵が描かれています。今、私たちが神社で見る絵馬の元になったと考えられているものは、奈良時代の遺跡から出土しています。現在の絵馬と同じくらいの大きさの薄い長方形の板



平城京出土の絵馬 異淳一郎「まじないの世界Ⅱ」  
『日本の美術』（至文堂 1996）より



絵馬の復原図 奈良国立文化財研究所『平城京  
長屋王邸宅と木簡』（吉川弘文館 1991）より

に、墨などで馬の絵が描かれたものです。

右の写真は平城京跡・二条大路の溝から出土した絵馬で、ヒノキの板に歩いている馬の姿を墨で描き、体はベンガラで赤く塗っています。赤馬なのでしょいか。ヒノキ板の年代を年輪年代法で測定したところ、天平九年（七三七）前後に作られたものとわかりました。年代が判明している絵馬としては、現在のところ最古のものです。

奈良市内の他の遺跡でも、同じような構図の絵馬が、天平十年と書かれた木簡と一緒に出土していますので、板に馬の絵を描いたものが何枚も作られて、祭りや祈りに使われていたと考えられます。

最初の頃の絵馬は板に馬の絵を描いたもので、馬の形はしていません。絵馬が作られるよりも前に、馬の形を模したものの（馬形代）が作られたと思われれます。

土で作られた馬―土馬―は古墳時代後期には既に作られていたようですが、遺跡でたくさん出土するのは七世紀後半（飛鳥時代）から奈良時代のものです。

奈良時代はじめに作られた地誌『風土記』は、天皇の詔によってそれぞれの国庁で編さんされ、朝廷に提出したものです。その中の『肥前国風土記（ひぜんのくにふどき）』に土で作られた馬が登場します。現在の佐賀県佐賀市のあたりの話です。

むかし、このあたりに大きなクスノキが生えていました。大変巨大な木で、朝日・夕日が差すとその大樹の影は二十キロメートルも先まで届いたといえます。

日本武尊（ヤマトタケルノミコト）がこのあたりに巡行されたとき、そのクスノキの枝や葉が茂り栄えているのを見て、「この国は栄の国（さかのくに）というべし」とおっしゃったので「栄の郡」となり、後に字を改めて「佐嘉の郡」となりました。



土馬 各務原市稲田十三号窯  
(前出「まじないの世界II」より)



土馬 各務原市寒洞三号窯  
(出典 同上)



土馬 桑名市多度町天王平遺跡  
(出典 同上)

（中略）さて、その西に川があり、上流に荒ぶる神がいて、往来する人の半分を生かし、半分を殺していました。そこで、この土地を治める豪族の先祖が、荒ぶる神を鎮めるためにどうしたらいいのか占いをしました。すると、この土地に住む二人の女性（巫女と思われず）が「下田の村の土を取って、人形馬形を作り、この神を祭れば、必ず和らぐでしょう」と託宣しました。そこで豪族が言われたとおりにして神を祭ると、神はそれを受け入れて、ついに穏やかになりました。（後略）  
（『風土記』〈日本古典文学大系 一九九三年 岩波書店〉より引用、現代語に意訳）

どのように神を祀ったのか、方法は書かれていませんが、土製の人形代（ひとかたしろ）と馬形代（うまかたしろ）が使われたことがわかります。古代から馬は神の乗り物、神聖な生き物と考えられていたでしょう。

遺跡から出土する土製の馬形代を土馬と呼んでいます。土器のように粘土を焼いたものです。(須恵器の窯で作られたものを陶馬といいます。出土例は少ないです。)

土馬を使った祭りや祈りの方法はよくわかっていませんが、平城京跡では、どの地域からといってもよいほど土馬の破片が出土しました。このことから、土馬を使った祭祀が、広い階層で行われ、祈りの内容も幅広かつたのではないかと考えられています。特に大規模な水路跡から数多く出土するので、水辺で祭祀が行われたのか、水に関わる祭りに多く使われたのか、ともいわれています。疫病の神を送る祭りも行われたようです。

土馬は奈良以外の地方でも出土していますが、その出土地点には火を焚いた跡や、須恵器と一緒に発見されることも知られています。火を焚き、須恵器に酒や食べ物盛ってお供えして、土馬に祈りが捧げられたのでしょうか。疫病退散と世の安寧を祈ったのかもしれませんが。

現在でも神社の祭りに馬を使うことがありますし、境内の神馬(しんめ)舎に馬がいるのを見ることがあります。神馬は神さまを乗せる神聖な役割を持つ馬です。

古代の人たちにとって、荒ぶる馬は神そのものに感じられたのかもしれませんが。穏やかな馬の姿を土で造形し、祈りを込めて神さまのもとへ送り出したのでしょうか。

今の私たちの不安や恐れを、土馬たちは受け止めてくれるように思います。

(文/たまい・ゆかり)



2月23日に弥生神社で開催したワークショップ「土馬を作ろう」に参加された皆さんの作った土馬。素材は石塑。



# 山の時間

中村政子

## 「陸の孤島」

今年の梅雨は、「梅雨らしい」を通り越して例年のない降水量をもたらした。私の住む集落への道は、地すべりによって通行不能となった。

最初は道路に山から水が流れ出し、水とともに運ばれた土砂がアスファルトの上に堆積していった。次には道路に亀裂が入り始め、朝の出勤時に気づいた亀裂は、夕方の帰宅時には10cmほどの段差になっていた。それがついには1m以上の陥没となり、300mの距離にわたって道がごっそりとずり落ちた。

車が通れなくなる前に、村は集落の住民に避難勧告を出した。9世帯15人のうち4世帯は村の中心部や村外に避難し、残る5世帯7人は集落に残った。地すべりが止まらないと、道路の復旧にはいつ取り掛かれるかわからないといわれ、また動く地面に引つ張られて傾く電柱は、停電を引き起こすだろうともいわれ、避難しないという選択にはある程度の覚悟が必要だったともいえる。

残留するにはそれぞれの理由があつたことだが、集落自体に危険が迫っているのではないかぎり、ここを離れる気にな

れなかったのは私だけではないと思う。わが家の場合、私以外の人間になつかない犬、2匹の猫、そして91歳の認知症の母を抱えての避難を考えたら、避難せずこのまま家にいるのがいい、という結論を出すのに迷いはなかった。

そもそもこの集落に住むということは、陸の孤島になることへの覚悟がなければ住めないのだ。隣の集落との間は、山の中腹に刻まれた一本道でつながっている。道中、落石もあれば倒木もあり、時には路肩が決壊することもある。大雨が降れば、ふだんは水のないところが沢になって、水と一緒に土砂を押し出す。そんなことは日常のように経験している。集落の孤立化は、起こり得る事態として常に頭の中にあつた。

食糧の備蓄は、米、味噌にはじまり乾物や缶詰など合わせたら、1カ月は持ちこたえられるかなというくらい。煮炊きの燃料は、4年前からガスをやめて灯油のコンロを使っている。灯油が切れても七輪がある。灯油のほかの燃料として薪、炭、豆炭を使っている。ちなみに冬の暖房は、薪ストーブと豆炭こたつである。風呂は、天気がよければソーラー温水器が水を温め、それで足りなければ薪を焚けばよい。避難せず残った世帯は皆、少なくともこれくらいの備えはしてあつた。

突然の災害ではあつたが、集落の住民はさほど動揺することもなかった。元からの住民にとっては、今回の地すべりした場所で50年近い過去に同じような経験をしていた。それに昔からこの集落は、村の中でも最奥の「孤島」のような集落だっ



東西300mにわたって陥没した道路の東端

たので、自給自足の暮らしを経験してきた人々には、道が途絶したところで驚くことではなかった。

途中から移住してきた住民にしても、だいたいこんな山奥に住もうというくらいだから、街と同じような便利な暮らしを求める人などいない。たいていは行き過ぎた現代の社会や暮らし方に嫌気がさして山奥を目指してきた人たちだから、多少の不安はあっても、一種のチャレンジのように受け止めている面もある。物資が入らなくても、電気が止まっても、今有る物だけでどれだけ生きられるかやってみようという気持ちもあって、集落の孤立化を前向きに受け止める向きもあった。

天気予報はまだ傘マークが続き、時折雨止みをはさみはするが、雨脚が強くなることもあり、心配なのは道路の地すべりがどこまで進むかだった。そして集落と川を挟んで向かい合う対岸の斜面からは、以前からあった崩落が少しずつ広がっていて、カラカラと土砂の落ちる音が聞こえていた。

早朝と夕方、2人の男たちが自発的に集落の周囲を見回り、今日はどこそこがまた10cmくらい陥没していた、などと情報を伝えてくれていた。ふだん同じ集落内においても、お互いに顔を合わせることはほとんどないのだが、安否確認や情報共有やら意見交換やらで、残った住人たちのつきあいは意外にも活気づいた。こうした状況によって、自然とお互いに助け合う共同体の色合いが強くなったように感じられる。

郵便、宅配便、生協の配達は、道の陥没の手前まで来てくれるようになり、道の段差は徒歩で通ることは可能だったので、行ける人が一輪車を押して取りに行くことにして、まったくの孤立化は避けられた。また停電が予想されることから、中部電力から残留世帯に1台ずつポータブル発電機と燃料のガソリンが貸し出された。こうして集落に残った人たちの不安もかなり解消されていた。

「陸の孤島」生活は、1週間ほどであっけなく終わりを迎えた。万が一の場合、緊急車両も入れないということで、村は仮復旧を急いだのだ。まだ雨も止まず、地すべりは続いていたが、山



陥没した道路の西端

肌を流れていた水はパイプを入れて水抜きすると、地すべりの動きは鈍くなっていった。道路の陥没箇所や段差には土砂を入れてなだらかにし、一応車が通れるようになった。

新聞社、テレビ局がさっそく取材にやってきて、住民の安堵の声を筋書き通りに拾って行った。だが、待てよ。こんなに早く安心してしまっているのだろうか？雨はまだ続いているし、地すべりも止まったわけではない。車が通れるようになったからといって、なんでもなかったような顔をしてしまっているのだろうか？この自然によってもたらされた困難に対し、人間はもつとじっくり考える時間を持った方がいいのではないだろうか？この体験から学ぶことは、本当はもつとたくさんあるんじゃないだろうか？そしてそれを後世に伝える必要があるのではないだろうか？今回はこれで済んだとしても、これで済まない事態は今後も予想されるのだから。予想外の早急な復旧に、どこか違和感を抱かずにはいられなかった。

思えば、孤立した集落での生活は充実した時間だった。インターネットで得られる情報よりも、自分の足で歩き回り、自分の目で確認する状況の方がはるかに重要だった。私たちがその上で暮らしている大地が、いかに脆いものかということも身をもって知った。故老たちの語っていたことを思い出し、今更ながらにその重さに気づくこととなった。人間は自分自身の失敗や躓きから多くを学ぶように、自然の災禍から学ぶことは更に多いと思うのだ。

(文／なかむら・まさこ 写真／サイモン・ピゴット)



造船の様子（ティイの墓の壁画）

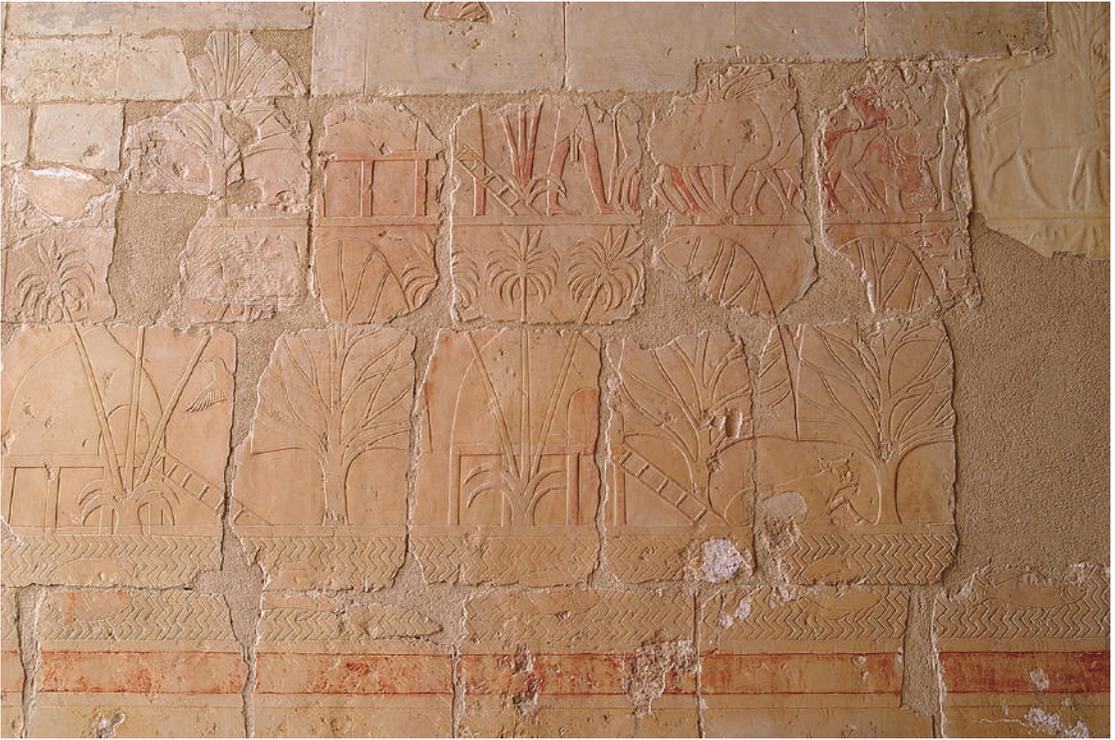
# 大いなる緑を越えて

-Beyond the Great Green-

和田浩一郎（エジプト学）

ナイル河のほとりで生涯をすごした古代エジプト人にとって、旅とは船で行うものだった。ナイル河の船旅は墓壁画にもしばしば登場し、また船の模型が墓に副葬されることもあった。エジプト人とナイル河の繋がりの深さは、あらゆるところで感じることができる。他方で海は、多くの人々にとって馴染みのないものだった。しかし特別な品々を手に入れるために、古代エジプトの船乗りたちは困難に満ちた海の旅にも乗り出していった。

古代のエジプト語で海は、「大いなる緑」を意味するウアジュ・ウルと呼ばれた。古代エジプト最古の宗教文書である『ピラミッド・テキスト』には、エジプトの地がウアジュ・ウルの只中にあるという表現が見られる。これはヌンと呼ばれた原初の水が、世界を取り巻いている表現ともとれるが、北は地中海、東は紅海に面するエジプトが、海に囲まれていると認識されていたのも確かである。『ピラミッド・テキスト』が記された古王国時代（前2540〜2120年頃）には、エジプト人は地中海を北へと越えて名高いレバノンのスギ材を持ち帰り、紅海を越えて東のシナイ半島まで銅やトルコ石を調達に赴き、また南へと向かいプントの地との交易で乳香を得ていた。エジプトでは見られない高床式の住居や紅海



プントの高床住居（ハトシェプスト女王神殿の壁画）

に生息する魚が壁画に描かれていることから、エジプト人が実際にプントまで行っていたことは確かである。

古代エジプトの船は現代の船とは異なり竜骨を持たず、外板をほぞ継ぎして内側に梁を渡す構造だった。エジプトよりも航海の経験を持っていたシリア地方から技術を導入し、波の圧力に耐えられる機構を持った外洋船も建造していたが、耐久性は必ずしも高くなかったのだろう。『難破した水夫の物語』には王の船乗りたちがいかに勇敢で、天候の変化を読むのに長けていたかが語られている。しかしそんな船乗りたちであっても、突風と大波で船が沈むのを防ぐことはできなかった。

シリアの都市国家ウガリトには、航海の安全を祈願して神殿に船の碇を奉納する習慣があった。古代エジプトに類似の習慣があった様子はない。しかし信心深い古代エジプト人のことである。危険と隣り合わせの船旅に臨む際には、神に祈りを捧げ、水難除けの護符を胸に船上の人となったのだろう。

\*現在のスーダン南部からエリトリア付近の紅海沿岸と推測されている地域

（文・写真／わだ・こういちろう）

# 海を渡ってきた宮島様

〔周防大島付近に伝わる宮島伝説〕

松本 昭司



海から臨むお積（おつみ）地区の宮島様（写真提供：濤良美智）

僕の住む山口県周防大島町沖家室島のその沖合に水無瀬島（みなせじま）がある。沖家室島を本島とする属島である。今は無人島だけとかつて戦前には沖家室島民が住んでいた。本島の沖家室小学校の分教室（分校）もあった。

ここには古い時代に宮島様が祀られていたそうだ。その宮島様は、今は沖家室島からほど近い、周防大島本島の大積（おおつみ）・小積（おつみ）地区の中ほどに建立されている。巖島神社に産土神（うぶすな）として祀られている。遷されたのは天保年間というから、今から約一八〇年前の話になる。

巖島神社の前浜には広島県の安芸の宮島と同じ赤い鳥居がある。今でも旧暦の六月一七日には管弦祭が厳かに執り行われている。地元では「十七夜」と呼んでいる。

話は僕の小さいころになるが、僕の住む沖家室島の刈山丁Ⅱ区は、この十七夜が夏の始まりでもあった。十七夜は子供会が家々から焚火の木をもらい受け、浜に櫓を組んで火を焚いた。店で花火を買い打ち上げたものだ。管弦祭をもじったものであろうが、子どもには花火の解禁日でもあった。

もうひとつは海に入る解禁日でもあった。昔からこのへの海は「エンコ」がいると信じられていた。海の河童である。そのエンコがときどき悪さをする。子どもを海に引き込んで溺れさせるのである。十七の夜はエンコが宮島様にお参りして留守にするので、海に入っても引きずり込まれることはないと信じられていたのだ。これは後から知った。



お積の厳島神社



管弦祭と宮島様の船遊び



生島（いきしま）の宮島様

この地区の他にもうひとつ宮島様が祀られている。道の駅「サザンセトとうわ」にほど近い生島（いきしま）というところに赤い鳥居があるがそこである。かつては潮が満ちると離れ小島であった。現在は埋め立てられて陸続きとなった。この生島という名の由来が面白い。宮島神は三女神と言われている。九州は福岡県北部・筑紫の国の宗像大社から、政治経済の中心が九州から大和地方へと移行するのに伴い、海を渡ってきたと言われている。

この沖家室島の西に浮かぶ平郡島がある。古くは平島（へぐりじま）ともいう。宮島の神様はこの地に腰を下ろしたところがある。ここには浦が六つしかなく、神様は七つないといやだとい、この地を去った。そしてこの地を五十谷（いや）と呼ぶようになった。その次に腰を下ろしたのがこの周防大島である。一息ついたところで島が揺れたというのである。「この島は生きている」といって、いそいそと出てったそうだ。地震でもあったのだろうか。そしてこの島を生島（いきしま）と呼ぶようになった。

厳島に渡った神様はよほど気に入ったのだろう。「安芸の宮島まはれば七里、浦は七浦七恵比須」と詠われる。宮島航路を走るフェリーの名を「ななうら丸」という。地名は歴史を背負う碑文でもあるのだ。

（文・写真／まつもと・しょうじ）



## 浜

森 岳人（書籍編集者）

高校生の頃、よく授業をサボって「浜」へ行った。学校が埋立地  
にあり、自転車を15分も走らせれば、人工海岸に行けたのだ。この  
学校の生徒はその人工海岸を「浜」と呼び、試験や文化祭などが終  
わるたび、打ち上げと称してよくそこへ向かったものだった。

高校生活も終盤に入った11月下旬、遅刻タイムで家を出ると、学  
校をスルーしてそのまま「浜」へ向かった。川沿いに海岸へ真っす  
ぐ伸びるサイクリングロードを走り抜け、薄曇りの砂浜に着くと、  
週末とは打って変わって人影はほとんどなく、静かな波音だけが流  
れていた。

防波堤に登ると、ひとりの女子生徒が目にとまった。冷たい風に  
長い髪をなびかせ、じっと遠く海を見ていた。近くの高校の制服を  
着ていたが、彼女も授業をさぼってきたのだろうか。その女子生徒  
に促されるように、自分も防波堤に腰掛け、海を眺めた。

もうすぐ高校生活も終わる。これからいったいどんな人生を送る  
ことになるのだろうか。自分は何をしたのか、何をすべきなのか。  
周りには、志望大学はもちろん、将来の職業とか収入まで考えてい  
る者もいたが、自分は受験する大学すら決まっていなかった。自分  
の存在理由や社会における存在価値を自問自答して、一歩も前に進  
めずにいた。どうやって皆人生の目標を定められたのだろうか。なぜ  
自分は生きる目的が見つからないのだろうか。気持ちばかりが焦って  
いた。



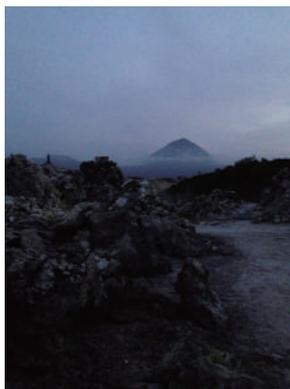
ずっと海を眺めていると、心身が水平線と一体化してくるような感覚になる。目の前の東京湾を出れば、太平洋へ。そのまま東に向かえばアメリカ大陸。南に向かえばオーストラリア大陸。海の水は、つながっている。水の分子同士が接していて隔たりはない。分子のつながりをたどっていけば、世界中のどの海にも行ける。その一滴の海水は、遠い世界への導きの糸のようでもあり、世界中の海の一部なのだ。

「個にして全、全にして個」。目をつむると、たった一滴の海水から拡がる世界がありありと見えてくる。そうだ、とりあえず漕ぎ出せば、海はどこかに連れて行ってくれるだろう。たまたま着いた島で面白いことが見つかるかもしれない。嵐が来れば沈むかもしれない。その時はその時だ。むしろ海の上が辛ければ潜ってみればいいかもしれない。また違った世界が待っているだろう。

気がつくとき女子生徒の姿はなく、目的意識の呪縛は、波に解かれていた。

あれから30年。目の前のことをそれなりに一所懸命にやってきたけれども、人生の目標はいまだに見つかっていない。自分なりの信念をもつて生きているつもりでも、きっとその時々々の時流に少なからず流されてきたはずだ。これからも様々なところに流されながら生きていくだろう。そして心の海は、いまだ見ぬ世界へ誘ってくれるだろう。

(文・写真／もり・たけこ)



旅の止まり木・10

次の旅のために

谷口明子 (陶芸家)

これを書いて今のは7月上旬であります。

「旅の止まり木」などという題で寄稿させて頂いているように、私は国内外問わず隙あらば旅に出たいと思つて生きているので、事実上首都圏から出ることすら憚られる現状は悲しみ以外の何物でもない。無駄だとわかつていてもネットを開けばつい旅行予約サイトで行きたい町への航空券やホテルの空きと価格を検索するなど未練がましい行為を繰り返すばかりであったがそんな中、ある読書をきっかけに少し建設的な気持ち芽生えてきた。

「ひと皿の記憶」(四方田犬彦)。これは著者の四方田氏が世界各地で食べたものを軸にその地の思い出を語るエッセイで、私自身も過去に訪れたことがある場所や食べたことのあるものもいくつか登場した。だが、それらに対する私と氏の印象は大きく異なっていた。というより、私の感性、知識、行動力、味覚の幅などが氏ほど充実していなかったために、たくさん要素を感じできずじまいだったことに気づかされたのだ。もちろん私が私として経験した旅や食事は他と比べるものではなく、私のかげがえのない宝であることに変わりはないが、それはそれとして、その人の在り方次第で同じ対象からでも受け取れる



シャウレイ / リトアニア

プラハ / チェコ

成都 / 中国

東海道新幹線 / 日本

高知県 / 日本



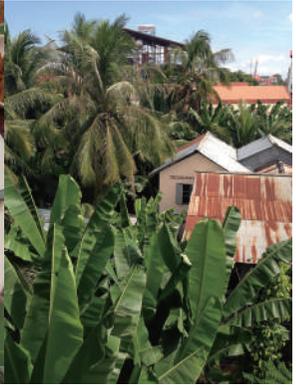
リガ / ラトビア



新疆ウイグル自治区 / 中国



シエムリアップ / カンボジア



ものが全く違ってくるということを改めて感じた。であるならば、次の旅をより深く味わえるように、今のうちに受け皿としての自分をより充実させることを考えよう、と思った。

旅への態度というところで言えば、昔は、あえて事前情報を入れずに出発するのをよしとしていた。事前情報による先入観によって、現地での自由な感じ方や新鮮みが妨げられてしまう気がして嫌だったのである。だが今は考えが変わり、予備知識を得ておくことは現地で出会う物事への解像度が上がることにつながるし、何より自分の刹那的な感動のために無知のまま現地を訪れたことのエゴイスティックさ、その土地の人や文化への失礼さに、今さらながら恥じ入る思いがする。

そしてまた、このような具体的に都度経験して考えて答えを更新していく類の営みは、人が暮らす陸地の社会での話で、それとは次元の違う「海」という存在が眼前にたっぷりとひろがっていることも忘れないでおきたい。

漁業、領海権の設定、あるいはもつと身近に海のレジャー等、人間は海にも抜き差しならずかかわってはいるが、どれだけ働きかけても本質的には海は人間の領域にはなり得ない圧倒的な異物（異空間）だと感じる。そしてどんな大陸も、その海に囲まれている。私達の生きる陸の世界で自分はどうしたらいいのか右往左往し考えること、そしてそれらがまるごと海という異次元に取り囲まれているという事実への畏れと興奮入り混じる思い。この両輪を脳のどこかに置き続けることが、私にとって受け皿を充実させる種である気がしている。

(文・写真 / たにぐち・あきこ)



サハラ砂漠 / モロッコ



重慶 / 中国



ソウル / 韓国



バルセロナ / スペイン

# 本を読む。小西洋友

(おがわ・ひろとも／図書館司書)

今回は「海」を考える5冊を選んできました。地球物理、経済、文学etcと人類があらゆる形で海を考えていることが分かります。陸上の軌くびきが全く形を変えていくように感じることこそ海を考える魅力だと思います。

## 海の教科書

波の不思議から海洋大循環まで

柏野祐二／著

講談社 (2016.6)



## 海から見た世界経済

山田吉彦／著

ダイヤモンド社

(2016.3)



## 海の文学史

鈴木健一／編

三弥井書店 (2016.8)



## 潜れ！さかなクン

東京湾 五島列島 熱海

さかなクン／著

NHK出版 (2019.7)



## 海は生きている

(講談社青い鳥文庫)

富山和子／著

大庭賢哉／著  
講談社 (2017.7)



私たちの暮らしに大きく影響する海の状態。普段は考え及ばない海の姿を最新の研究から解説しています。波はどうして起きるのか？数千年かけて海水が地球をめぐる「海洋大循環」とは？海を知ると地球のイメージが全く変わって見えてきます。

「海を知れば、経済（世の中の仕組み）がもつとわかる！」！人類と海の関係がいかにも歴史を織りなしてきたか、そしてその将来は：：： 壮大な想像をかきたてる一冊です。わかりやすい図表で経済予測・分析に使えるデータを豊富に収録しています。

日本人は海を見つめて何を想ってきたのか。日本文学の豊かな海の世界を考察しています。「日本古典文学が描いた海」、「竜宮城はどこにある？」など興味深い論考を多数収録。日本の美意識・想像・信仰への強い影響がうかがえます。

あのさかなクンが日本中の海に潜る！NHK人気番組の書籍化です。東京湾では海底神社の謎を探り、五島列島では世界最大級のサンゴを調査。たくさんのおさかなと出会いました。海中という未知の世界を愉しくおさんぽします。

豊かな恵みを人間に施してくれる海。魚や海藻、塩、そして「波や潮」という水の力も。それなのに人間は海をぞんざいに扱い、報いを受けようとしています。水のつながりはいのちのつながり。人間と海の間を問い直すのに格好の入門書です。

# 続・トルコ女性の手仕事

上岡和江

前回、「トルコ女性の手仕事」の前編として、トルコで知り合った日本女性に、「イーネオヤ」と呼ばれるとても繊細なレース編みのことを聞いたり、アイシャという名のトルコ人女性を紹介してもらって、彼女の織物教室を見学したり、郊外にあるアイシャの家まで同行することになったところまでを書きました。（ちなみに「イーネ」とは縫い針、「オヤ」は編み物を意味します。



(写真1) 購入した手織りのマット (約50cm四方)

アイシャに誘われて、すぐ近くかと思っただけ同行したアイシャの家には、荒野の中をタクシーで一時間ほど走ってやっとたどり着きました。いえ、招き入れられた家はアイシャの家では無く、結局誰の家だったのか今でも分かりません。牛を沢山飼っている農家でしたが、室内はよく片づいていて居心地の良い家でした。

言葉が通じないので、身振りで示されたとおりにするしかなく、靴を脱いで、とにかく年配のご夫婦が食事をしている最中の居間に、上がり込み食卓に座りました。そして、勧められるままに一緒に食事を頂きました。

野菜の煮物のようなものが多く、日本人にはとても美味しいのですが、ちぎったパンで巻いてどんどん私の口に押し込んでくれるので、困りました。トルコには美味しいという意味のジュエスチャーがあります。手の平を上に向け、五本の指を閉じるとチュエリップのような形になりますが、胸の前でその手を上下するのです。他に意思表示の方法がないので、そのジュエスチャーをすると喜んでまた口に入れてくれました。

タクシーのドライバーも一緒にご馳走になっていましたが、やがて席を立って庭に行きました。少しすると、庭にたわわに実っていた枇杷と桑の実を収穫して、キッチンで洗ってお皿に乗せてきました。桑の葉をあしらってあります。小さな実の枇杷がジューシーで甘く美味しかったです。

いつの間にか、私も緊張が取れて、すっかり家族のように勝手に家の中を動き廻り、小振りなマットを見つけ、売ってもら



(写真2) 屋外にある絨毯の織機  
二人の頭上にある丸い玉は、緯糸用の糸

それから、肝心なイーネオヤの縁編みの付いたスカーフを沢山出してきて見せてくれました。本から得た知識ですが、トルコの女性は嫁入りの時に多くのスカーフを持参するのです。嫁入りする娘が肩身の狭い思いをしないように、母親

次に行ったのが、どうやらアイシャの家のようでした。家の中を全部見せてくれて、清潔なキッチンには、オリーブの実の塩漬が入った大きなペットボトルが沢山並んでいました。トルココーヒーをご馳走になっていると、アイシャが自分の履いているのと同じズボンを持ってきて私にも履くようにと言います。

\*\*\*

うことになりました(写真1)。羊毛を紡いで染色し、織りまで全てを自分で行ったもののようにでした。どんな身振りでそのことが分かったのか、今では覚えていませんが、その時は通じていたのだと思います。屋外にある機場も見学し(写真2)、その家を辞しました。

は必死でスカーフに縁編みをして、百枚とか二百枚作るのだそうです。間に合わなければ一族の女性の手を借りても仕上げます。一枚一枚の完成度が高いので、さぞかし大変なことでしょう。そのスカーフはスカーフ用の特別なタンスに入れて持参し、新しく家族になる女性達への土産にしたり、近所の挨拶回りで配ったりします。同じように近所や家族から貰うこともあるので、数はあまり増減せずにタンスにしまわれています。きちんと畳んで、形が崩れないように一枚ずつ白い仕付け糸をかけて重ねてあります。

そのように大切にしまつてあるスカーフをアイシャは出してきて、私の頭に次々に巻いてくれました。仕付け糸を解いて広げてくれたのですが、まるで仕立て上がった着物の仕付けを解いて娘に着せかけるような、昔の日本の母親を思わせる仕草でした(写真3)。

ここでまたドライバーが、写真を撮るから外に出るように身振りと言います。イスラムの女性と同じダブダブズボンを履き、美しい縁編みのついたスカーフを被って、庭でポーズをとらされて写真を撮っていると(写真4)、そこに車が入って来ました。



(写真3) アイシャの家の室内



(写真4) 桑の木の下でドライバー氏撮影

車体には Jandarma(ジャンダルマ)と書かれています。四人の若い兵士が降りてきました。アイシャと何か話していましたが、腰には拳銃を帯びていて緊張感を持った人達でした。この兵士達の訪問と、私がそこにいることが何か関係があるのかも知れないと思いましたが、私は只にこのこととしていられるより他に何もできません。するとドライバーが、キッチンから冷えた水の入ったペットボトルと、コップを持ってきて兵士達に勧めました。庭の桑の木にたくさんなっている実を採って食べさせると、炎天下なので、彼らはそのもてなしをとて喜んでいられるように見えました。ドライバーのこの機転のためか、彼らの態度は和らぎ、やがて帰って行きました。

後でジャンダルマについてウイキペディアで調べたところ、「平時には国境警備・治安維持・交通取り締まりなどをし、民間人が電話による通報をすれば緊急出動することもある」などと書かれています。もしかすると、農村部に入り込んだ私達を村人が怪しんで、通報されたのかも知れないと今では思っています。

アイシャと別れ、また一時間タクシーに揺られて町まで帰りました。ドライバーとの身振りでの会話で、彼の子供は娘さんばかり七人ということでしたが、嫁に出す時にスカーフの用意ができるのかと心配になりました。現在ではもうそんな習慣は廃れつつあるとは思いますが、言葉の壁があつて確認は出来ませんでした。ともかく手織りのマットを手に入れ、スカーフも沢山見て、収穫沢山の小旅行でした。

翌日、夫の仕事仲間のトルコ人にこの日の体験を話すと、私がトルコの文化に興味を持つていたことを喜び、彼はその場で奥さんに電話をして、奥さんが嫁入り時に持参したスカーフを一枚私に分けてくれるという話を付けてくれました。後日、本当にホテルに届けてくれました。

また別の日のことですが、町中でバスを待ちながらイーネオヤの本を見ていると、隣にいた女性がその本を見たがつて、それをきっかけにスマホで家族の写真を見せ合ったりしてすっかり親しい気分になりました(写真5)。オリーブの塩漬けを持つて孫娘の家に行く途中のようでした。言葉が通じないのにもかかわらずそんな交流ができたのも、トルコ人が日本人に対して示してくれる好意もあるのでしょうか、手仕事を好きな女同士という親近感が、国を超えて理解し合えたのかと思います。

トルコでは、昔から地域で収穫した生糸を使ってイーネオヤの縁編みをしていました。養蚕の盛んだった地域では、それぞれの地域独特の模様が伝承されているようです。これからも折角のご縁を大切にして、トルコの手仕事や絹に注目していきたいと思えます。

(文・写真／かみおか・かずえ)



(写真5) 見知らぬ女性とバス待合所にて

# カイコ 蚕の神様を訪ねて

谷口悌三

(映像作家／民俗研究者)

(六) カイコを飼ってみた



4 齢、体長は 3~3.5 cm、エサは人工飼料



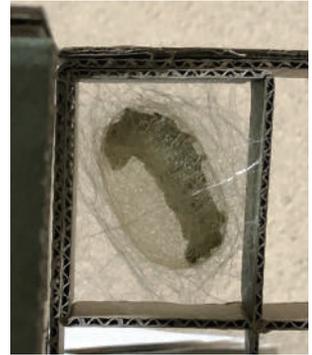
5 齢になりエサを桑葉に替えた。もりもり食べてムチムチになってます。蚕の足は 16 本

STAY HOME ぶじぶじで養蚕してみようと「繭と蚕の里山のクラフト作り」というサイトから飼育セットを注文しました。20 頭入り (+おまけ 2 頭) で 4000 円 (送料含む)。

カイコは 4 回脱皮して成長した後には繭をつくりまわす。今回はすでに 3 回の脱皮を終えた 4 齢の状態から始めるコースにしました。1 週間ほどで、脱皮の準備で動かなくなる「眠」に入ります。

ここまでは (桑が原料の) 人工飼料で様子を見ていたのですが、脱皮して 5 齢になってからは、桑葉を与えることにしました。1 日に 1 頭が桑葉を 2 枚くらいペロリと食べることがわかり、近所にある桑の木から毎日 40 枚を摘んであげると日々が 1 週間ほど続きます。もりもり食べるのは見ていて楽しいですが、20 頭なら合計で 800 枚ほどを食べ尽くすので、それなりに大きな桑の木がないと困ることになります。木がない場合は、人工飼料でもいいと思います。また毎日摘んでこななくても、冷蔵庫に保管しておけば桑葉は 1 週間ほどは大丈夫のようです。

送られてきたときは 2 cm ほどだったカイコは、3 倍の 6 cm ほどまで大きくなります。すっかりムチムチになったところで、ぼったりと食べなくなると、繭をつくる準備に入ります。このときまでに「族 (まがらひ)」を用意しておきます。これは薄い段ボールで創作した「まぶしタワー」ですが、繭をつくるひとつの柀は、高 5 cm × 幅 4 cm × 奥 3 cm ほどが最適とされています。この柀の中で 6 cm ほどのカイコが回転しながら糸を吐いていくので、楕円の繭ができていき



族（まぶし）で営繭



ます。その繭糸は1200mにも及びます。今回は「里山黄金」という種類にしたのですが、見事な金色の繭ができました！

繭の中で幼虫から蛹（さなぎ）になり、2週間ほど経つと羽化した成虫が繭に穴を開けて出てきます。繭をつくる糸を吐きながら、今度は糸を溶かす液も体内でつくりますので不思議なものです。繭は穴があいてしまうと、糸が切れて繰り取ることができなくなり、真綿にして紡ぎとれば生糸にすることはできます。

成虫は羽があるものの飛ぶことはできません。羽化するとすぐに交尾します。少しお腹が大きいのがメスで、交尾の後、しばらくすると産卵し始めます。一頭あたり200〜300粒ほどの卵を産みます。基本的に春の5月頃に卵が孵化する一化性で、それを春蚕（はるこ）といいますが、しかし冷蔵庫で低温保存することで、夏や秋に孵化するように時期を調整できるようになると、1年に8回以上も養蚕を行なう農家もありました。

成虫の体はフワフワのプニプニでなかなか可愛いです。なんと口がないので、エサをあげることもできないのが不憫ですが、古代から家畜として改良されてきた結果なのでしよう。成虫の寿命は一週間程度とされていますが、今回の種はとても元気で最長は23日も生きていますが、ました。

お蚕さまと過ごす静かな日々は、驚きがあり神秘的でもあり、また愛おしいものでした。

（文・写真／たにぐち・ていぞう）

## ツユクサ



荒谷 渚

毎年、夏が近づくと、庭に青い花を沢山植えたくなります。風に揺れる涼しげな青い花を見ていれば、しんどい真夏の暑さが気持ちばかり和らぐ気がするからです。ブルー・サルビアやメドウセージ、ルリタマアザミなど…花屋で青い花の苗を見かけると、ついつい手を伸ばしてしまいます。

しかし、青い花といっても実際にはどちらかというとき色に近いものが多く、真つ青と表現できるような花はあまり見かけません。空や海を連想するような、美しく澄み切った自然の生み出す青。心を穏やかに落ち着かせる純粋な青。そんな青色を持っている花はないだろうか…。私が見つかり浮かべるのは、ツユクサです。

ツユクサは古くから日本に自生している野草で、その花はアサガオの様に早朝に開き、昼過ぎには萎んでしまいます。一説によると、そんな朝露のように儂い様子や、朝露を帯びて咲く姿から、ツユクサという名が付けられたと言われています。英名でも一日花を意味する「Dayflower」[Asiatic dayflower]と呼ばれます。大きな二枚の青い花びらと小さな白い花びらが一枚、黄色のしべが合わさって、さながら蛍が飛んでいるように見えることから「蛍草（ほたるぐさ）」という別名もあります。

ツユクサは万葉集にも登場しますが、その名は「月草（ツキクサ）」と表されています。万葉集にはツユクサが登場する和歌が九つありますが、いずれもツユクサが朝開いて昼には萎れてしまうこと、また、ツユクサで染めた色はすぐに落ちてしまうことから、移ろいやすい恋心や儂さの象徴として表現されています。中でも私が好きな一首があります。

月草の 借れる命にある人を いか知りてか後も逢はむと言ふ

（ツユクサのようにひと時で消えてしまう命だというのに、なぜまた後で逢いましょうなどと言うのでしょうか）

一体どんな境遇の人が、どんな気持ちでツユクサを見つめ、この和歌を詠んだのだろうか、知る由もない誰かの物語を連想させられます。

また、ツユクサの学名である「*Commelina communis*」という名は、十七世紀に活躍したオランダの植物学者コメリンに由来します。

コメリン家には三人の植物学者がおり、そのうちの一人は、残念ながら名を馳せる前に早逝してしまっただけです。ツユクサが二枚の鮮やかな青い花弁と、その下にひっそりと小さな白い花弁が隠れている様子になぞらえて、この名がつけられたそうです。

庭の隅や道端に、夏になるといつの間にか当たり前のように咲いているツユクサ。ごく小さな花にも関わらず、思わず目に止まるその鮮やかな色合いと、素朴で可憐な佇まいに、ずっと昔から人々は不思議と心を奪われてきたようです。どう頑張っても人には創り出すことのできない、自然が生み出す純粹な美しさ。ツユクサは今も昔もこれからも、隔てなく人々の心を動かすのでしょう。

（文・絵／あらたに・なぎさ）

# 南瓜のういろう

牛乳とスパイスを加えた洋菓子風味のういろうです。冷やしても美味しく召し上がっていただけます。



黒糖牛蒡ういろう

(15×20cmの角型容器一個分)

南瓜(皮と種を除いた正味) 200g

牛乳 260g

餅粉 80g

薄力粉 160g

200g 砂糖 200g  
塩 ひとつまみ

[各適宜]  
シナモンパウダー  
クローブパウダー  
南瓜(トッピング用)



- 1 皮と種を除いた南瓜を2～3cm角に切り、電子レンジで柔らかくなるまで加熱。フードプロセッサーで攪拌、または裏ごしします。
- 2 型に薄くサラダオイルを塗るか、又は水で軽く湿らせてラップを敷いておきます。
- 3 トッピング用の南瓜を2mm程度に薄くスライスします。

下準備



# 作り方

1 すりつぶした南瓜に牛乳を混ぜておきます。



2 ボウルに砂糖と塩、粉、スパイス類を計量し、①を注ぎ入れ均一になるまで攪拌します。ザル等で一度液を漉します。

3 液を適量残して型に注ぎ入れ、強火で15分蒸します。

4 残りの液を表面に均一に流し、南瓜のスライスを敷き詰めます。さらに20分ほど蒸し、竹串を刺して生地がつかなければ蒸し上がりです。冷ましてから好みのサイズに切り分けます。



\* 南瓜の水分量によっても生地のはらかさは前後します。レンジ加熱後の状態を見て牛乳の量を調節するとよいでしょう。

弥生神社で開催する行事のお茶菓子にも登場します。

（権禰宜 池田沙）



## ご自宅で「大祓詞」書写会・ ワークショップ

この春より、ご自宅で取り組むワークショップ、手仕事の会を始めました（材料と資料を郵送しております）。

四月 手仕事の会「カラフルマスク作り」

五月 手仕事の会

「ユーカリ葉のスワッグと

ふっくら香り袋」

六月 ワークショップ

「端午の節句と薬玉作り」

七月 ワークショップ 「勾玉守り作り」

八月 手仕事の会

「夏のまんまるコースター作り」

八月 手仕事の会

「夏のさわやかリースとスワッグの会」

八月 ワークショップ 「紙衣と七夕飾り」

九月 ワークショップ 「土馬に願いを」

『大祓詞』書写会は、毎月行っております。弥生神社会場での開催（ご予約制）のほか、郵送で書写セットをお届けしております。

## 宗教・文化講座

十月より【宗教・文化講座】が本格的に再開いたします。会場とオンラインの同時開催を予定しております。

十月四日 「古代エジプト人の精神世界」

講師 和田浩一郎（國學院大學講師）

十月十八日 「神道を考える」

講師 加瀬直弥（國學院大學准教授）

十月三十一日 「キリスト教の精神世界」

講師 中西恭子

（津田塾大学・明治学院大学講師）

\*ワークショップや講座の開催予定は、当社ホームページをご覧ください。詳細とお申し込みフォームを掲載しております。

（ご案内はがきお送りします）

毎月の案内はがきをご希望の方は、はがきにご住所と「案内ハガキ希望」の旨を明記の上、弥生神社までお送りください。

編集後記 十八号が発行となりました。今号も宗教・文化講座を担当されている先生方や普段より弥生神社をサポートしてくださる方々にご協力いただき

きました。感謝申し上げます。テーマは海。異国の海、記憶の中の海、祭りの場としての海。文化や思想を運ぶ海。言葉と文章の海を通して、自由な気持ちや解放感を得ていただけたら幸いです。

海の彼方ニライカナイは生命の源であり魂の帰る場所と言われています。『大祓詞』は、神々によってあらゆる罪穢れが大海原へと流されていくさまを伝えていきます。海とこの国に生きる私たちとの関わりを思うとき、先の東日本大震災の悲惨さを思い起こすとともに、畏怖の気持ちや人間の無力さ謙虚さをも呼び起こし、深く広大な信仰の在りかでもあると気づかされます。

今年はコロナ禍でどこか窮屈さを感じながら過ごしてきました。日常のささやかな景色や植物、自然の表情に敏感になり、失われたものや大切なものをあらためて考える日々でもありました。皆さまのご参拝がままならない時期には、神社とこの場所が在り続けることの尊さを思いました。また、オンラインやお手紙での皆さまとの交流を通して、ご縁のありがたさを感じました。またお会いできる日を楽しみにしております。今年も心穏やかに年末年始を迎えられますように。

（権瀬宜池田奈）

印刷 文明堂印刷

編集発行 弥生神社

神奈川県海老名市国分北二一三三―一三三